四谷の
千枚田だより
第67号

春一番　棚田かけぬけ
せせらぎの　わき水も暖かに
海老　美智子

四谷の千枚田周辺に出没する野生動物

近年、イノシシやサルなど野生動物が里地まで頻繁に出没。農作物の被害が甚大で、野菜やシイタケなどは厳重な檻の中で栽培の状態である。そこで、獣害対策の一環として市経済課から依託された「暗視ビデオカメラ」を設置、野生動物の生態の把握を試みた。

期間：2008.8.28～09.2.14

方法：赤外線センサー暗視ビデオカメラ(全天候型野生動物自動撮影装置 SE-5DV)を認識撮影時間 90 秒にセット。千枚田周辺 500m 以内を調査範囲として実施した。

結果：「イノシシ」は設置期間中 57 匹を確認。出没は日暮れ直後の 18 時 44 分から夜明け間際の 4 時 55 分までみられた。個体数の最も多かったのが「うり坊」の集団で 5 匹が 2 回、親仔連れで 4 匹が 1 回、3 匹が 3 回、2 匹が 5 回、他はそれぞれ 1 匹であり、出没匹数は予想を遙かに上回る結果となった。場所(小字)別には佐賀 19 回(32 匹)、池田 8 回(10 匹)、中曽根 4 回 4 匹)、千枚田入口 3 回(7 匹)、大貝津、合戸は共に 2 回(2 匹)で、地域別の分布はイノシシの大きさ(推定重量)等の特徴からそれぞれが異なった棲息場所であることと解釈した。なお、11 月 15 日の狩猟開始後における里地への出没記録は 11 月 25 日の 1 回のみであった。

考察：①佐賀で、毎夜出没する通り道に電気柵を張った結果、9 月 4 日(3 匹)と 9 月 5 日(1 匹)の 2 回とも電気柵を警戒し回避した。この記録から電気柵の効果が実証された。②千枚田入口で 9 月 27 日、12 時 37 分に記録された 5 匹は安杖さんグループの水田(約 2.5 ㌃)を早朝 4 時 55 分まで「ぬた遊び」をし、壊滅状態にした。③池田・中曽根では捕獲檻入口までの摂餌行動は顕著であったが警戒心を表し、あと一歩の捕獲が不可であった。④出没は複数が隊列を作り行動していることが判明した。⑤目視であるが禁猟前日の 2 月 14 日に堂久保、合戸の竹林に出没、タケノコが採掘された。　　･･･なぜ　イノシシは狩猟解禁、禁猟を察するか？･･･

「タヌキ」は 8 匹、生息数が減少しているものと認識していたが設置場所全域で出現がみられ、イノシシとの共生が保たれることを期待した。

「ノウサギ」は 3 匹で、夜間の摂餌行動がみられた。

「イタチ」はヤマアカガエルの産卵時に親ガエルを襲うことが記録され、新たな知見を得た。

連谷サル追い隊

2 月 17 日、サル対策の一環として行政と地域が一丸となって四谷・連谷害獣対策組合が結成された。この組合は、地域ぐるみで鳥獣害に対応することにより地域の獣害を軽減し農業の活性化に寄与することを目的に発足した。

四谷・連谷害獣対策組合員名簿

小山舜二(組合長)　今泉雅男(副組合長)　原田　豊(書記)　村雲宣充(会計)　長谷川英一　今泉良治　高橋伸治　夏目宏一　稲熊利一　稲熊芳美　丸山　朗　原田武典　原田　浩　小山広一　田畑長利

昔から人間は里地にサルやイノシシは後ろ山にお互いに棲み分け、秩序が保たれていたが経済成長が起因、野原や耕地が森林化し野生動物の生活圏を人間が奪ってしまった。もう、共生どころでなく敵、味方の関係に陥ってしまった。

なにはともあれ、我々の生活を守るため身勝手だが、サルは山奥(後ろ山)へ戻ってもらわなければならない。その手だてとしてサル追い隊を柱に地域ぐるみで「追い上げ」を敢行しなければこの地に活きる楽しみも失せてしまう。

地域の皆さんにお願い　この地域において獣害は最も深刻な問題であり、その解決策に「連谷サル追い隊」が結成された。「批判」や「こけ落とし」は後回しにして地域活性化、住み善いむらづくりのため皆さんの協力をお願いします。

中山間ふるさと・水と土保全基金の運用益により「四谷の千枚田」のパンフレットが作成されました。

県議会一般質問

愛知県議会二月定例会で三月四日、須崎かん議員(自民)が四谷の千枚田を含めた「里地、里山の活用・保全について」一般質問しました。

《概略》里地里山は、農林産物の生産活動の場としてだけでなく、日本の原風景としての価値、地域文化の伝承、生物多様性の確保や、自然環境学習・健康づくりの場、洪水防止など多くの機能を有しており、地域住民とともに都市住民も大きな恩恵を受けております。　ここで、新城市北部の鞍掛山麓に広がる四谷の千枚田の取り組みを紹介します。

《要約》かつては千二百九十六枚の棚田が米の生産調整などで三百七十三枚までに減ってしまった。地区住民が、これ以上棚田を減らしては成らないとの思いから、平成三年からその姿を撮り、平成六年の愛知国体のメイン会場の「やまびこの丘ギャラリー」で写真展を開き全国発信をした。平成九年には鞍掛山麓千枚田保存会が発足、棚田の保全活動が本格化すると同時に都市住民との交流による地域活性化への取り組みが始まった。平成十七年には、第十一回全国棚田サミットが開催されるなど、各種の事業・イベントを通じて四谷の千枚田の素晴らしさを発信。耕作者の平均年齢は五十九才と、その若さは他所の棚田関係者から驚きの声が多く挙げられている。平成十八年から社会貢献活動に力を入れている製薬会社一〇〇人の社員や地元企業を受け入れ草刈り、植樹等の環境整備が行われている。企業等の受け入れに当たっては保存会の財源は大変苦しいが地元住民の協力のもと何とかやりくりをしている。先祖の築いた偉大な財産を連綿と守り、その棚田を糧にさまざまな活動を継続し、活き活きと暮らせる里地里山の「村づくり」に邁進している小さな集落であるが、すこぶる元気が良いそうです。

知事は、「COP10 開催を契機に持続可能な社会作りの先導的役割を担う地域を目指し、先駆的かつ着実な取り組みを進めていかなければならないと表明された。また、豊かな生態系が将来にわたって継承される県土を目指す」と表明された。現在、策定中の「あいち自然環境保全戦略」において里地里山をどのように位置づけ、その保全にとりくむか伺いたい。

《答弁要旨》「あいち森とみどりづくり税」を活用、里山林における除伐等の整備、保全活動、里山における自然観察会などの環境学習の実施に要する経費を、一団体百万円を限度に交付することとしている。

冬間の藁草履つくり

豊橋の日用品問屋の鈴木社長さんが秋の千枚田を訪れ、「この辺りで藁草履を作ってくれる人はいないか」の問いに村の芸術家　小山柳二が立ち上がった。

柳ちゃは連谷地区の丸山絹子、丸山貞代、小山よし子、小山今江、原田八重子さん(七十五～九十才)に話したところ、初めは後込みしていたが、やがて張り切って目標の五百束を瞬く間に達成してしまった。

すぐに支払われたお金に「これは私の小遣い、しばらく眺めていたい。この楽しみを持ってきてくれた鈴木社長さん(柳ちゃも)ありがとうございました、これからも宜しく」と大喜び。

「民話・伝承」の地巡り

三月二十日～二十三日、日本の民話の会主催 第三回「民話と伝承の旅―愛知県奥三河地方―の地巡りが行われ全国から大勢訪れる。中日の二十一日には千枚田周辺の民話・伝承が語られます。

棚田　ビオトープ　プロジェクト　岐阜恵那

「日本の棚田百選」のひとつ、岐阜県恵那市の坂折棚田。二〇〇七年四月から坂折棚田の二カ所に「かえるのビオトープ」が作られました。

三月二十一、二十二日に「第二回かえるの卵を探そう！」が開催され、二十一日は「かえるのビオトープ」を中心に坂折棚田全域で、山間部や谷地の水辺に生息するヤマアカガエルの卵を探します。また、二十二日は自然観察指導員の小山舜二が「棚田の生物」について講演します。

主催　問い合わせ
NPO法人恵那市坂折棚田保存会
恵那市中野方振興事務所
℡　0573-23-2111

東三午さん交流会

四月三日、東三河懇話会は豊橋の名豊ビル八階ホールで第九十一回東三河午さん会を開催、ゲストに小山舜二が招かれ『四谷の千枚田』今を振り返って」を題材に講演します。

横浜ゴム新入社員研修

エコに取り組む横浜ゴム新城工場の本年採用新入社員研修(三十八名)が「社会人としてのマナー」、「工場組織」、交通安全」などと山積みの研修が行われる。

研修中の四月七日には「四谷の千枚田の保存、保全活動」や自然、伝承文化を学びながら同工場の班長さんや地元参加者を交え「ふれあい広場」の環境整備などボランティア活動を通した研修が行われます。

発　行　平成二十一年三月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二